



1 観光客の動向

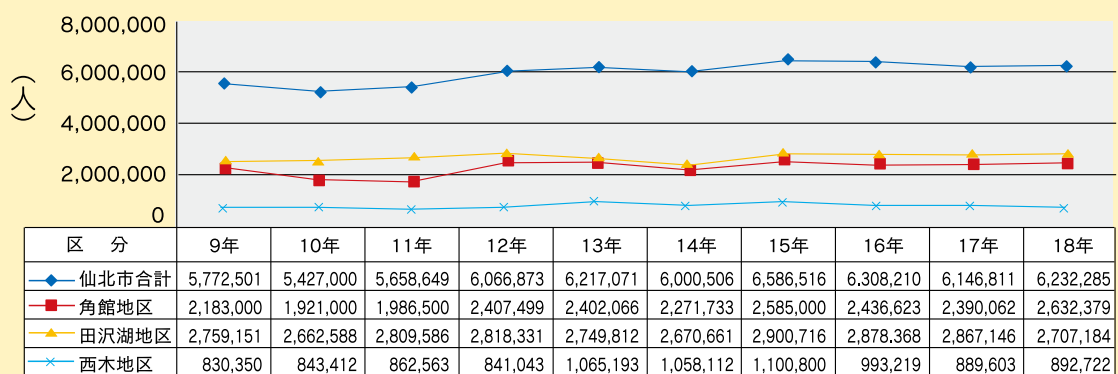
仙北市は、美しい自然や歴史、文化など多くの観光資源に恵まれているだけではなく、人のぬくもり、やさしさなど有形、無形の様々な観光資源を有しています。この観光資源を大いに活用することにより、また、先人の努力による自然や文化財の保護活動などにより、現在では東北有数の観光地となっております。

観光誘客のため、角館、田沢湖、西木、各地区それぞれが持っている自然環境や文化などの特長を活かした施策を展開しているところです。角館地区は、武家屋敷通り周辺が観光の軸となっており、桧木内川堤のソメイヨシノの桜並木、武家屋敷のシダレザクラのほか、角館のお祭りなどに象徴される歴史と文化のまちとして知られています。田沢湖地区は、豊かな自然が息づいている地域で、田沢湖や秋田駒ヶ岳などの大自然を誇り、この自然を活かした観光スポットや温泉郷などが数多く見られます。西木地区は、美しく、素朴な農山村風景が広がる地域で、グリーンツーリズムなどの農家体験をとおして、農山村のありのままの姿を見せるなど都市と農村の交流が盛んです。このように、仙北市は市全域が観光地といっても過言ではないほど、都会にはない自然や訪れる人々をやさしく受け入れる雰囲気を出していることから、県内はもちろんのこと、首都圏をはじめとする都会からの来訪者が多く見受けられます。

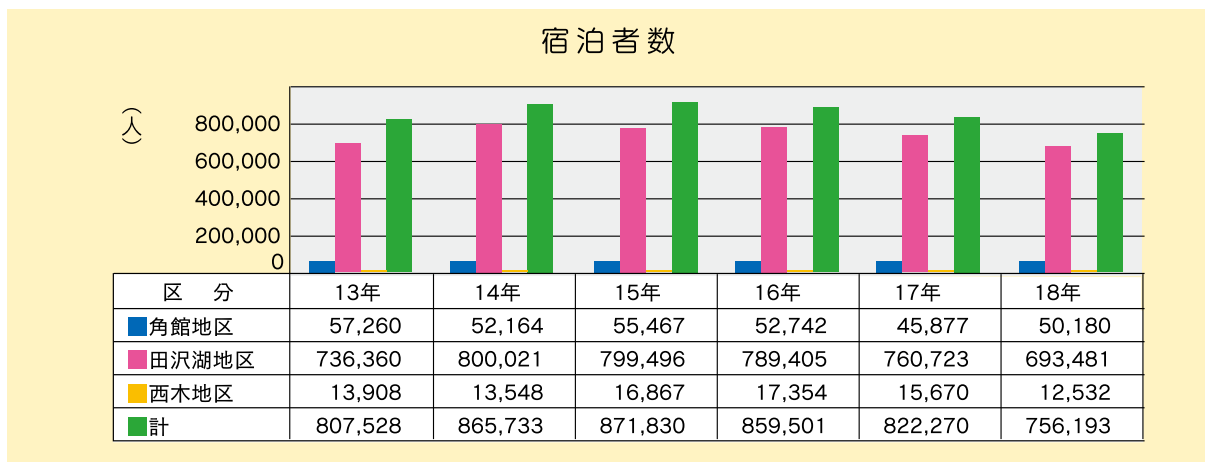
しかし、観光客数は、多少の増減はありますが、ここ数年6百万人台で推移しており、観光客を誘致するため様々な施策に努めてはいるものの、増加の兆候が見えてきておりません。

仙北市を訪れる観光客数を10年前と比較すると、角館を訪れる観光客はおよそ20%増加していますが、田沢湖、西木の観光客数にはあまり変化はありません。

観光客数の推移

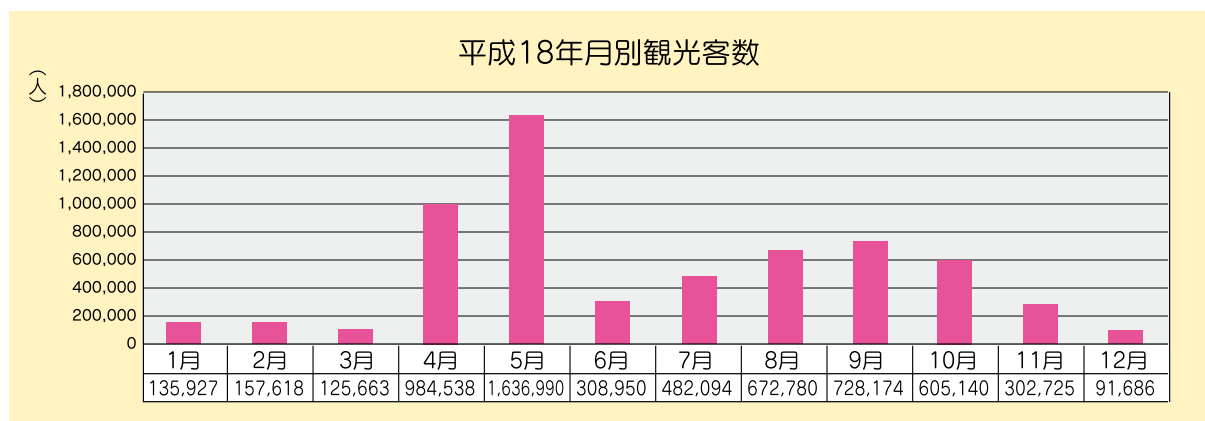


市の経済に大きな影響を与える宿泊者数も若干減少傾向を見せており、日帰り型の観光に移行しているのではないかと懸念されております。

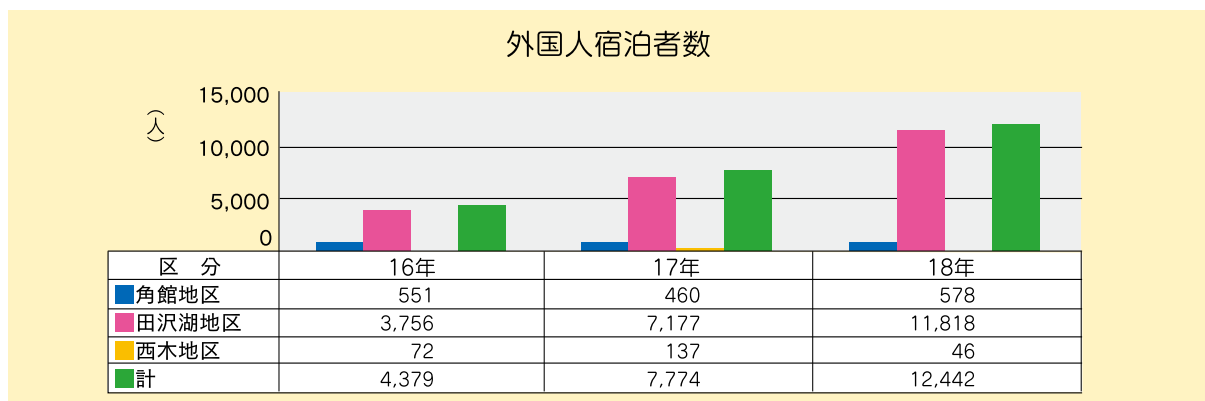


月別の観光客数を見ると、春に訪れる観光客は、一年間に仙北市を訪れる観光客全体のおよそ半分を占めております。これに対して、冬に訪れる観光客は、1割にも満たない状況と、季節により観光客数にかなりの差が生じています。

今後、冬期の誘客に力を注ぎ、魅力ある通年型観光地を目指す取り組みが求められています。



仙北市を訪れる韓国、中国、台湾をはじめとする外国人観光客は急激に増加してきており、この傾向は今後ますます強まることが予想されます。



2 観光の経済効果

観光客が仙北市を訪れ、観光に関連する宿泊、飲食施設、運輸交通機関などで消費される金額は、現在およそ250億円であり、目標である1千万人の交流人口では、400億円になると推計されます。観光消費は、所得や雇用さらには税収の増加など、さまざまな分野に波及するなど大きな経済効果があります。農業生産額は約55億円であることから、これと比較してもこの消費額が如何に大きな数字であるかがわかります。

このほか、仙北市のイメージアップが図られる、市外からの移住者が増えまちの活性化につながっていくなどの効果もあります。

3 観光資源

(1) 自然環境

◆ 山や川、湖

仙北市は、秋田県一の高峰である秋田駒ヶ岳、乳頭山に代表される美しい山々が連なり、その雄大な自然景観は訪れる人々を楽しませてくれます。ここはコマクサをはじめとする高山植物の宝庫として知られ、春から秋にかけてたくさんの登山客で賑わっています。秋田駒ヶ岳から眼下に見下ろすルリ色に輝く田沢湖の眺望は素晴らしく、辰子姫伝説が語り継がれている水深日本一を誇る神秘の湖です。

また、樹齢数百年ともいわれ、日本一のブナで知られる和賀山塊をはじめとする、観光地化されていない手つかずの自然が多く残されています。

このほか、春から秋にかけて多くの釣り人が訪れる桧木内川や玉川、山奥深くの溪流は、釣りファンには人気のスポットとなっています。玉川の中流に位置する抱返り渓谷は、東北の耶馬溪ともいわれ、秋田県を代表する絶景地で、独特の青い溪流と滝は訪れる人たちに感動を与えています。

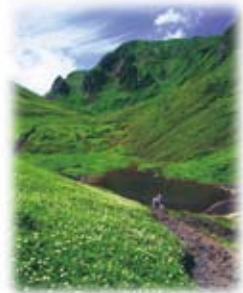
◆ 温泉

田沢湖地区には、日本一の温泉湧出量を誇る玉川温泉や乳頭温泉郷、田沢湖高原温泉郷、水沢温泉郷など全国的に知られた温泉があり、温泉郷周辺の自然や温泉効能が評価され、地元の方たちだけではなく遠方から訪れる方々も多く見受けられます。

市営の温泉休養施設も各地区に点在しており、子どもからお年寄りまで市民の憩いの場となっています。

◆ 花

春は幾種類もの花が咲き誇ります。角館地区桧木内川堤のおよそ2キロメートル、約4百本のソメイヨシノの桜並木や武家屋敷のシダレザクラ、田沢湖地区刺巻湿原のミスバショウ、西木地区八津・鎌足のかたくり群生地は、その規模の大きさや美しさは共にすばらしく、4月から5月にかけての開花時期には花巡りの観光コースとなり、全国から花を求め大勢の方々が訪れております。



秋田駒ヶ岳や乳頭山に自生するコマクサやチングルマなどの高山植物や西木地区のマリーゴールドで飾られたフラワーロードは、ほかではあまり見られない仙北市ならではの光景といえます。

また、自分たちの楽しみとして家庭で大事に育てられている花、道端に何気なく咲いている花も多く見られ、訪れる方々の気持ちを癒しています。

◆ 市の風景

仙北市は米どころ仙北平野の一角をなしており、ここに広がる田んぼや畑の田園風景、さらに里山や森の緑、清らかに流れる小川などで形作られている景色は、昭和の日本を思わせる、のどかな原風景のように今なお多く残されています。

地元に住んでいる私たちにはなかなか気づかない貴重なこの自然や景観は、四季折々にその姿を変え訪れる人々を迎え入れています。



(2) 食、特産品

◆ 郷土の食

仙北市には、西明寺栗や生保内タケノコなど、質や味で日本一といわれるもの、山や川の自然の恵みで得られる、アユ、イワナなどの川魚や、キノコ、タラの芽、ウドなどの山菜も豊富であり、これを利用した加工品も数多くあります。新鮮な山菜や野菜の直売所も市内各所に点在しており、収穫の時期にはこれらを買求める多くの市内外のお客さんと賑わっています。

また、家庭で古くから保存食として用いられてきた、いぶり大根などの漬物や、昔から食されていた、なると餅、えびす餅などのお菓子も、現在は県外でも知られるようになっており、仙北市のお土産品としての地位を確立しています。最近では、菓子業者、商工会の共同により角館饅頭「しこたま」を開発するなど、積極的な取り組みを展開しています。

郷土料理では、きりたんぼ鍋やしょつつる鍋、稲庭うどんが秋田県の郷土料理として飲食店で提供されているところですが、家庭でも来客のもてなし料理などとして食されています。田沢湖地区で発案された山の芋鍋はその独特のこしの強さが好評で、当地の名物料理として定着しています。



◆ 民芸品

仙北市の民芸品は、ヤマザクラ類の樹皮を用い、その光沢を活かした「樺細工」やイタヤカエデの若木を薄く裂き編み込んでいく「イタヤ細工」が有名です。このほかにも、独特の味わいのある白岩焼き、日本の風土に合った桐タンス、風習風土を題材にした手作り土鈴、つる細工など、地元の自然や文化を活かした土産品は観光客に好評を得ています。



現在、「樺細工」に続く特産品のブランド化やオリジナル商品の開発と普及に向けて行政と関係団体が一体となった取り組みを行っています。

(3) まつり、イベント

仙北市には、数百年前から続いている伝統のあるお祭りや地域の方々が主体となった小さなお祭り、全国的にも知られている観光客を呼び込み、市民と共に楽しめるイベントなど、自然や地域の特性を活かしたお祭りやイベントが一年を通して数多くあります。

数あるお祭りやイベントの中で代表的なものをあげると、春は花をテーマにした「角館の桜まつり」、「刺巻水ばしょう祭り」、「八津・鎌足かたくり群生の郷」、夏は「たざわ湖まつり」、「戸沢氏祭」、秋は「角館のお祭り」、「抱返り紅葉祭」、冬は、小正月行事の「上桧木内の紙風船上げ」、「角館の火振りかまくら」や「田沢湖高原雪まつり」など、四季折々、その地域に合った多彩な伝統的な祭りが楽しめます。このほか、代々受け継がれている、地域の人たちでつくるお祭り「ぼんでん」や「ささら」には、この地域特有の歴史、文化が垣間見られます。

また、田沢湖マラソン、田沢湖ツーデーマーチなどの全国的に知られてるスポーツイベントも盛んに行われています。



(4) 歴史、文化

仙北市は、平成17年に角館町、田沢湖町、西木村の3町村が合併して誕生しましたが、古くからこの地域は「北浦」と呼ばれ、同じ生活、文化圏となっており、歴史的、文化的に深いつながりをもっていました。

この地域が「北浦」と呼ばれるようになったのは、中世南北朝時代以降、南部滴石(しずくいし)の豪族であった戸沢氏が角館城主となり、秋田安東氏や雄勝小野寺氏と肩を並べる大名になった頃からです。藩政時代に移り、国替えにより戸沢氏がこの地を去った後に入った芦名氏、その後の佐竹北家の時代へと続きます。明治時代の廃藩置県、郡制施行、昭和の市町村合併、そして平成の大合併により仙北市となりました。

歴史ある仙北市には、有形文化財の「草彌家住宅」、「仙北市角館伝統的建造物群保存地区」、民俗文化財の「田沢湖のまるきぶね」や「角館祭りのやま行事」などの国指定文化財のほか、「中里のカンデッコあげ行事」や「ささら舞」など他の地域には見られないこの土地の歴史を背景とした特有な行事があります。このほかにも、地域に伝わる郷土芸能、風俗習慣などのこの地に根ざした伝統文化を次の世代に伝えるために、保護、保存や後継者育成に努めているところです。



4 交通アクセス

(1) 道路

秋田市と盛岡市を結ぶ国道46号、秋田県央を縦断する国道105号や田沢湖地区から鹿角市へ抜ける国道341号は、仙北市の骨格道路として位置づけられ、観光客は、この国道を利用して仙北市に入り、各観光スポットへ移動することになります。この3国道は、何れも自然の眺望を満喫しながら走ることができる、観光路線としても申し分のない道路環境です。

また、高速道路も東北自動車道盛岡インターチェンジからはおよそ45分、秋田自動車道大曲インターチェンジからもおよそ30分で仙北市に到着できることから、県外の方々をはじめ、多くの観光客に利用されています。

(2) 鉄道

秋田新幹線の乗降駅が市内には角館駅、田沢湖駅の2つの駅があり、運行数も一日片便20便を超え、盛岡駅での乗り換えもなく、首都圏からは僅か3時間でアクセスできるなどの利便性が受け、首都圏等からの旅行者の多くが秋田新幹線を利用しています。平成9年の開業時より首都圏等からの旅行客数が大幅に伸びています。

秋田内陸縦貫鉄道は、北秋田市と仙北市を結ぶ生活、通学路線として平成元年に開業しました。人口の減少等による影響を受け、利用者数が年々減少していますが、沿線の自然景観や田園風景の美しさが評判となり、観光を目的とした利用者が増加しております。

(3) 航空

秋田空港、花巻空港からは、車や新幹線を利用して1時間余りで仙北市の各観光スポットに着くことができ、首都圏から秋田新幹線を利用した場合とほぼ同じ所用時間で仙北市にアクセスすることができます。大館能代空港からは、車や秋田内陸縦貫鉄道を利用したアクセスも可能となっています。

5 観光の主な課題

仙北市の観光の現状をみると、様々な問題、課題を抱えております。これをひとつずつ解決することにより観光の振興を図る必要があります。

主に次のような課題が明らかになっております。

① 冬期観光客が少ない

一年間に仙北市を訪れた観光客の入り込み数を季節別にみると、4月から5月までの春の観光客数は、角館の桜まつりの集客力により、年間観光客数の半数近くにあたる、300万人弱という結果が出てます。これに対して、12月から2月にかけての冬期に訪れる観光客は10%にも満たない状況となっており、年々減少する傾向が現れています。

仙北市の小正月行事に訪れる観光客も増加傾向をみせないほか、スキー客の極端な減少が冬期観光客の減少につながっているものと思われます。

② 観光地間のアクセスが不十分

秋田新幹線乗降駅が市内に角館駅、田沢湖駅の2駅あることや秋田空港からも比較的距離にあるという立地のため、首都圏から短時間でアクセスできるようにはなっていますが、市内の観光地から観光地への三次アクセスはまだ十分とはいえない状況です。

また、自動車による旅行者が多いとはいえ、遠方からの観光客は新幹線、飛行機などを利用している方が多いという状況を考えると、公共交通の充実を図り、三次アクセスの利便性を高める必要があります。

③ 情報発信の不足

仙北市のウェブサイト、観光キャラバン、観光パンフレットの提供等により仙北市の旬な観光情報の発信に努めているところですが、仙北市の魅力が適切、正確に相手方へ伝わっていない状況であることがアンケート調査の結果などでもうかがえます。

観光情報は、仙北市の魅力を知ってもらい、観光客のニーズを捉えた、正確でタイムリーな情報を提供することが必要です。この情報の良し悪しが観光客の増減にかなりの影響を与えるものと考えられます。

④ 受入態勢が不十分

観光客に接する際は、おざってたんせの心によるあたたかいおもてなし、接客サービスを心がけているところですが、依然として、市内各所の観光地で、お客様に対しての対応が不十分であるという指摘を受けています。

これは観光客それぞれの評価の基準や好みの違いはあるにしても、これまで以上におざってたんせの意識の高揚を図り、観光客が仙北市で楽しいひとときを過ごすことができるよう努める必要があります。観光客の受入態勢づくりがリピーターを増やす大きなポイントであると思われま

⑤ 日帰り、通過型の傾向

仙北市に宿泊される観光客数を県内の他市町村と比較すると、仙北市の宿泊率は12.1%と、秋田県平均の8.5%を大きく上回っています。地区別に見ると角館地区が1.9%、西木地区が1.4%と低い状況であるのに対し、田沢湖地区は25.6%と高く、田沢湖地区が仙北市全体の宿泊率を引き上げている状況です。

しかし、ここ数年宿泊率は漸減しており、日帰り、通過型の傾向が現れています。観光消費額の増加を見込むためにも、宿泊型、連泊型の観光を推進していく必要があります。